

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 古田徹也

本論文は、「真理」概念の内実を探究するウィトゲンシュタインの議論を跡づけることをつうじ、「人間的自然 (human nature) とは何か」という根本的問題をめぐるその思考に対して、一定の視角を開くことを目指すものである。ただし本論文は、ウィトゲンシュタインの膨大な遺稿に拡散している問いの断片を再編することよりも、その問いを引き継いでいる現代の議論の成果を積極的に活用することによって、ウィトゲンシュタインの思考の内実をできうるかぎり明晰なかたちで取り出すことを試みている。

第一章では、ウィトゲンシュタイン自身の議論と、マルコムやデイヴィドソンらによる考察を参照しながら、人間と他の動物とを画するうえで、「真理／信念」の対概念がポイントとなる次第を明らかにする。第二章ではまず、「真なる信念／偽なる信念」の対比を説明しようとする、伝統的な物心二元論の問題点を確認する。そのうえで、二元論を破壊しようとする大森荘蔵と前期ウィトゲンシュタインの相貌一元論、あるいはJ・マクダウェルやA・ノエらの解釈主義では、「真理」および「信念」という概念の内実を捉ええないことを論じる。第三章では、後期ウィトゲンシュタインの核心の一つである、いわゆる「私的言語批判」にかかわるデイヴィドソンの言語論を検討し、コミュニケーション一元論とも呼ぶべきその議論が、「真理／信念」を区別する最も基本的な条件を取り出すことに成功し、同時にまた後期ウィトゲンシュタインの議論の本質を取り出すことに成功している、そのこと这个消息を確認する。第四章では、デイヴィドソンの議論からはこぼれ落ちる人間的自然の重要な側面、すなわち、「文化の中で生きる」という人間のありかたを探究するために、「正直」と「正確」という、真理概念と最も深く関連する徳をめぐるウィトゲンシュタインの議論を主題的に扱う。そのなかで、我々が切実に必要とする言語的コミュニケーションは、実用性や効率性といったものによっては捉えられない特徴を持つことをも確認し、最後に、B・ウィリアムズの論点を踏まえて、人間的自然の探究は個別の文化の実相にさらに分け入って続ける必要があることを考察している。

本論文は総じて、人間的自然という哲学的／倫理的論点をウィトゲンシュタイン哲学と、その延長線上にあるさまざまな思考の狭間で考察しようとするものである。ウィトゲンシュタイン研究としてはなお疑念を挟みうる余地を残すとはいえ、第三章までの現代哲学の成果をめぐる明快な再構成、それを踏まえて展開された第四章の議論は、独自の考察を開くものとして、その力量が高く評価された。本論文が、着実に創意ある思考によって、以後の研究の礎を築こうとするものであることについては疑いを容れない。よって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。